動物レスキュー通信

2015年2月 第21号　（平成27年2月1日発行）

発行元
一般財団法人　国連世界動物救済支援機構　詩月財団

詩月(しづく)：詩月財団　理事長
愛玩動物飼養管理士　一級
お問い合わせ：sizuku.foundation@gmail.com

「どうして？」

作／ジム・ウイリス

ボクがまだ仔犬だった頃、アナタはボクの仕草を「カワイイ」と笑ってくれました。アナタはボクの事を「息子」と呼びました。ボクは靴や枕を噛んだりしたけど、ボクはアナタの親友になれました。ボクが何か悪い事をした時、アナタはボクを指さし「どうして？」と聞いたよね。でもすぐに許してくれて、ボクのお腹を優しく撫でてくれました。アナタはとても忙しかったので、思いのほかボクの躾には時間がかかったけれど、なんとか一緒にやりとげました。一緒にベッドで寝て、アナタの心の秘密に耳を傾けたり、一緒に散歩に出かけたり、ドライブに行ったり、アイスクリームを食べたり（あなたは、アイスは犬には悪いからと言ってコーンしかくれなかったっけ？）、ボクはアナタが会社から帰って来るのを、日向ぼっこしながら待っていました。これほど幸せな生活は他にはないと信じていました。でも、アナタは少しずつ会社で過ごす時間が長くなり、人間の親友を探しに出かけていきました。ボクは辛抱強くアナタの帰りを待ち、落ち込んだり失恋したアナタを癒め、アナタが間違った選択をしても小言は言わず、そして毎日アナタが帰って来た時、そして恋人が出来た時は大喜びして飛び跳ねるほどでした。その彼女（今ではアナタの妻）は「犬は人間ではない」と言います。それでもボクは彼女が来た時は歓迎し、彼女と仲良くなれるように努力し、彼女の言う事を聞きました。アナタが幸せだったから、ボクも幸せでした。

それから赤ちゃんが生まれて、ボクも一緒に歓びました。ボクは赤ちゃんのピンクの肌、そして香りが大好きで、ボクも彼らの世話をしたかった。でもアナタと彼女はボクが赤ちゃん達を傷付けるのではないか？と心配して、ボクはほとんどの時間を、別の部屋か犬小屋で過ごすようになりました。ボクも本当に彼らを愛したかった。でもボクは「愛の囚人」になってしまった。

赤ちゃんが成長するとボクは彼らの友達になりました。ボクの毛につかまって立ったり、ボクの耳をひっぱったり、ボクの鼻にキスをしてくれました。ボクは彼らの全てを愛し、彼らに触られる事に喜びを感じました。何故ならアナタはもう、ほとんどボクに触れてくれなくなっていたから。そしてボクは必要なら、命をかけても彼らを守ってもいい！と思いました。ボクは彼らのベッドに潜り込み、彼らの心配事や夢に耳を傾け、アナタが帰って来る車の音を一緒に待ちわびました。以前は誰かがアナタに「犬を飼っている？」と尋ねると、アナタは財布からボクの写真を取り出してボクの話をしました。でも最近では単に「飼っているよ」と言うだけで話を変えてしまいました。ボクは「アナタの犬」から「単なる犬」へと変わり、アナタはボクにかかる費用を不快に思うようになっていきました。

そしてアナタは他の街で新しい仕事を見つけて、ペットを飼ってはいけない住宅に引っ越すことになりました。アナタは「家族」の為の最良の選択をしたのかもしれないけれど、昔はボクが貴方の唯一の家族だった時代があったよね。ボクはドライブに連れて行ってもらえるのだと思いワクワクしました。でも、着いたのが動物保護センターだとわかった時は、また悲しくなりました。犬や猫、恐怖と不安の臭いがしいい飼い主が見つかると思うよ」と言いました。担当の人達は物悲しげに肩をすくめました。彼らは血統書付きでも中年の犬の現実を知っているのです。子供はボクの首輪を掴んで離そうとしませんでしたが、アナタはその指を強引に引き離しました。「お父さん、だめ！　僕の犬と別れるのは嫌だ！」とあの子は叫びました。ボクはあの子の事が心配です。あなたがたった今、息子に教えたことを…。友情、忠誠心、愛や責任、そして何よりも生命を尊重するということについて、アナタが息子に教えた事を…。アナタは僕と目を合わせず、帰り際にボクの頭を軽く撫で、ボクの首輪とリードを持って帰る事を丁寧に断りました。アナタは時間がないと言います。それはボクも同じでした。

アナタが去った後、優しい一人の女性は「引っ越しの事は以前からわかっていたのに、何故、新しい飼い主を探そうとしなかったのか？」と話していました。頭を横に振りながら、彼女達は「どうしてなの？」と言いました。彼女達はとても忙しかったけど、出来るだけボク達の世話をしてくれました。もちろん餌は与えられているけど、もっずっと前からボクは食べる元気もなくなっていました。最初は誰かがボクの檻の前を通る度に、ボクは前の方に飛び跳ねました。アナタの気が変わって、また迎えに来てくれたんだと思い、今の状況が単なる悪夢だと思い、そしてアナタでなくてもボクを愛してくれる誰かが来たのだ、と願いながら…。自分達の運命に気付いていない可愛い子犬達には僕は勝てないと悟った時、ボクは奥の角にうずくまり、ひたすら待ちました。その日の終わりに係員の足音が聞こえ、彼女と一緒に別の部屋に行きました。とても静かな部屋でした。彼女はボクを台に乗せ、ボクの耳をさすりながら「心配しなくていいのよ」と囁きました。ボクの心は、今から何が起こるのだろう。と不安でいっぱいになりましたが、安心感さえも感じました。「愛の囚人」となったボクは最後の日を迎えていました。でもボクは自分の事よりも彼女の事の方が心配でした。ボクがアナタの機嫌がいつもわかっていたように、彼女の気持ちもわかるのです。彼女の心の重荷は非常に大きいものでした。彼女は優しくボクの前足に止血帯を巻きました。ボクは昔、貴方を慰める時にいつもしたように、彼女の手を舐めました。それから彼女は慣れた手つきでボクの静脈に注射をさしました。チクッとしてから薬が体を流れるのを感じました。ボクは眠くなって横たわり、彼女の優しい目を見つめながら「どうして？」と呟きました。彼女に、ボクの犬言葉が解ったのでしょうか。彼女は「本当にごめんね」と言いました。彼女はボクを抱きしめ、ボクがもっといい場所、無視などされず、虐待や見捨てられる事もない、この地上とは全く違う、愛情と光あふれる幸せなところに行けるようにするのが自分の役目だと教えてくれました。ボクは最後の力を振り絞って尻尾を一度ふり、ボクが「どうして？」と言ったのは彼女にではない事を教えたかった。この言葉はアナタ、そう…ボクの愛する飼い主に向けたものなのです。ボクはアナタの事を考えていたのです。ボクはいつまでもアナタの事を記憶し、アナタを待っています。ボクがアナタを愛したように、アナタが人生で出会う全ての人から愛される事を願っています。

今回は少し角度を変えて物語を読んで頂きました。作者は、動物は人間の愛情と世話を受ける権利があり、全ての命はかけがえのないものである事、そして無意味な殺しを止め、捨てられる動物が増えないようにする為にも、去勢・避妊キャンペーンに協力して欲しい。という思いを込めて書き、非営利であれば著作権を明記して広めてよいとの事です。（詩月）